使徒パウロに学ぶ異邦人伝道

２０２３年４月１０日
西九州伝道所
佐々木正明

　使徒パウロは、異邦人への使徒と呼ばれる、目覚ましい働きをしました。しかしその名は、彼が実際に異邦人伝道を行い、素晴らしい成果を上げげたからではありません。むしろ、使徒の働きなどで、彼の活動の後をたどると、彼は異邦人の地を回りはしましたが、実際に訪れたのは主に大都市であり、そこには、すでにユダヤ人の会堂が設立され、ユダヤ教の宣教が活発に行われていました。パウロが、ユダヤ人に限られていた救いの理解を打ち破り、普遍的な福音、全人類に及ぶ救いの福音を語り伝えたのは、ほとんどこの会堂を中心にしてのことであり、たとえそこに異邦人がいたとしても、すでにユダヤ教に改宗していた人々か、まだ正式にはユダヤ人とはなっていなかったとしても、ユダヤ教の教えに深く馴染み、やがてはユダヤ教を受け入れて、正式にユダヤ人になろうかと考えていたような人たち人たちでした。みな、キリストを信じる信仰への導き手である養育係、すなわち律法と呼ばれていた旧約聖書を学び、その権威を受け入れ、メシヤと呼ばれていた救い主の到来を、今か今かと待ち焦がれていたのです。現在の日本人のような、旧約聖書など手に取ったこともない人たちが大部分で、キリストのことなど何にも知らないという、まったくの異邦人の状態ではありませんでした。

　したがって、パウロは完全な異邦人に対する伝道の困難さを、身をもって体験し、悩み、苦しみ、試行錯誤を繰り返しながら、右往左往してきた人物ではありません。日本人のために自国を後にした宣教師の苦労を知りません。それらの宣教師たちによって、クリスチャン信仰へと導かれた、日本人伝道者たちのように、「笛を吹いても踊らず」の人々に語り続ける、宣教の虚しさを感じることもありませんでした。私たち日本人伝道者から見ると、パウロは異邦人伝道の素人なのです。パウロの業績を観ても、日本人伝道の助けになるようなことは、ほとんど残されていません。あえて推論すると、パウロはユダヤ人の会堂で教えるたびに、彼の新しい教えに反対するユダヤ人との軋轢を経験しました。それで会堂を出て、集まりのできるところで集まり、新しい教えを継続して行きました。特にエペソでの、ツラノの講堂での集まりが、パウロやルカに強い印象を与えたようですが、それらの場所に集まる人たちの多くも、やはりユダヤ人よりも、すでにユダヤ教に興味を持っていながら、ユダヤ教徒になるための割礼と諸儀式、さらに国籍の変更などが妨げとなっていたために、正式にユダヤ教徒と成れないままでいた異邦人、あるいはユダヤ教に強い関心を持っていた、異邦人たちであったと考えられます。

　とはいえ、さすがにパウロは天才であり、多くの事柄で聖霊の導きと啓示を受け、また霊感

によって神の御心を誤りなく書かせられた、たぐいまれなる理解力と、深い洞察を持った人間でした。彼の数少ない異邦人伝道の記録の中でも、最も明白に経緯が記録されている、アテネのパルテノン神殿での伝道の様子を取りあげて、パウロの伝道の姿を分析しながら、異邦人伝道のわずかな記録に残された、パウロの豊かな知恵と深い洞察から学び、日本宣教の手本としたいと思うのです。(聖書引用箇所・使徒の働き１７章１５～３４節)

パウロはその伝道旅行の途中に、有名なアテネの街を歩き回る機会がありました。ただ、この町に留まって福音宣教をする計画は、初めからなかったようで、本当に通り抜けるような感じで、短期間、立ち寄ったに過ぎないと思われます。この異邦人の哲学や宗教で有名な町には、すでにユダヤ人の会堂がありましたが、町の哲学的傾向や宗教的環境から、あまり活発なユダヤ教の宣教活動は、できないでいたのかもしれません。当時のアテネの町が、どのような宗教的環境にあったか、あるいは思想的・哲学的状況に取り囲まれていたか、使徒の働きの記述を観るだけで明らかです。

Ⅰ.　パウロの憤り

町中が偶像に満ち溢れていた状況を観たパウロは、心に激しい憤りを感じました。ルカが記したとおりです。しかしここで間違ってはなりません。パウロが憤ったのは、偶像礼拝をしている人々に対してではありません。あくまでも、偶像が満ち溢れている環境、状況、そのような文化に対して、激しく憤ったのです。

パウロは旧約聖書の律法が教えている、偶像礼拝の禁止を良く知っていました。ですから、イスラエル人がそのような偶像礼拝を行っていたとするならば、多分、その人たちに対して怒りの炎をも燃やしたことでしょう。しかし、ここでパウロが見たのは偶像礼拝をしていたイスラエル人ではなく、あくまでも異邦人だったのです。異邦人であっても、偶像礼拝は非常に重い罪であり、パウロ自身がロマ書の一章で論じているとおりです。しかし彼は、異邦人の偶像礼拝の罪と、イスラエル人の偶像礼拝の罪の類似点と相違点を、しっかりと理解していました。イスラエル人の偶像礼拝の罪は、神に似せて造られた人間としての、本源的罪であると同時に、イスラエル人のみに与えられた、特異な律法を犯す罪であったのです。異邦人の偶像礼拝の罪は、文字で書かれた律法を破る罪ではなく、神に似せて造られた人間としての本性、パウロの言葉を借りるならば、心に記された律法、あるいはその人自身がその人自身の律法であると言われた、その律法に反する罪だったのです。神の姿に似せて造られた人間の本性が、人間として生きていくための律法だったのです。(ロマ 2:12-15)　それはすべての民族に普遍的に与えられたものであり、ユダヤ人にも与えられていたものですから、ユダヤ人が偶像礼拝をすると、二重の意味で偶像礼拝の罪を犯すことになったのです。神の姿に似せて造られたところから発する人間性は、ユダヤ人をも含めて、あらゆる人間に共通する律法だったのです。この律法は人間が人間として生きていく基本的な定めであり、理性的な理解によって生み出された、ある

いは作り出されたものではなく、人間の情緒性、感受性による、本能的なものだったのです。この人間性に違反する罪、人間の本性に違反する罪が、異邦人の偶像礼拝の罪でした。

パウロはまた、異邦人の偶像礼拝に対して、神が非常に忍耐深く、寛容と理解を持って取り扱っておられた事実にも、気づいていたと思われます。旧約聖書の記述を調べてみると、神は異邦人が単に偶像礼拝をしているからというだけで、厳しく刑罰を下されたという例がないのです。それは、ユダヤ人がまだユダヤ人になっていなかった時代、アブラハムの父の時代からヨセフに下り、モーセに至るまでにも読み取ることが出来る事実です。アブラハム自身も、月の女神を拝むシュメール文化の中に育ち、偶像礼拝を普通のこととして育ったことでしょう。はっきりとしていることは、アブラハムが天地創造の神に近寄ったのではなく、天地創造の神が、偶像礼拝をしていながらも、美しい人間性を現していただろうアブラハムの家族に、近づいて下さったことです。

アブラハムが神に召されてから、孫のヤコブが自分の一行の天幕にあった偶像をすべて取り除き、樫の木の根元に埋めたある種の宗教改革までは、およそ１５０年間もの隔たりがあります。それらの偶像の中には、妻のラケルが自分の父から盗み出して来た、小さな偶像も含まれていたことでしょう。神は寛容であられたのです。しかしその偶像礼拝が廃頽の極みに達し、風俗の乱れがこれ以上許されない状態に至って、神の厳しい刑罰が下された例があります。多分、ノアの洪水や滅亡の淵に追い詰められたニネベの物語が、それらに当たるのでしょう。特にロマ書の一章に語られているような、偶像礼拝による性倫理の廃頽に対する神の厳しい裁きは、ロトが住んでいたソドムとゴモラの滅亡の物語、あるいはその後のロトの娘たちの早まった行動にも、現れていると考えるべきです。その一方でヨセフの妻は、偶像礼拝をしていた宗教の司祭の娘でしたし、モーセの妻もまた、ミデアン地方にあった偶像を祀る宗教の、司祭の娘だったのです。モーセはその妻の父親、すなわち偶像教の司祭に対しては、最上の尊敬を払ってもてなし、また彼のサジェッションを聞き入れて、イスラエルを指導しているほどです。

パウロは異邦人伝道の実際問題に関しては、現在日本人と言う異邦人を相手に伝道をし続けている私たちに比べると、素人に近い者でした。しかし彼には、閃く知恵と洞察力があったのです。彼は偶像礼拝をしている異邦人たちを、現在の多くの西欧人宣教師や、彼らに教えられた日本人牧師や信徒たちのような、上から目線で裁き、厳しい叱責や侮蔑の言葉を投げたりはしませんでした。かえって、神の国、神の支配を外れて、悪魔の支配、悪魔の国に陥った惨めな人間に対する、同情の気持ちが溢れていたのです。伝道の対象者に対して、怒りの気持ちで語るのではなく、あくまでも愛と優しさをもって、本人たちが知らないままに陥っている、困難な状況に対する同情をもって、普遍的福音の解き明かしをたのです。

Ⅱ．　パウロの敬意

パウロは真の神を知らず、偶像礼拝をしている人々に、憤りではなく、まず敬意を表現し、賞賛の言葉をもって語り始めました。軽蔑や侮蔑、あるいは嘲笑や叱責や裁きの言葉をもって

始めなかったのです。彼は言いました。「あなた方はすこぶる信仰に熱心でいらっしゃいます。」パウロは、偶像礼拝そのものと、何かを礼拝しないでは居れない人間の本性、特質、本能の違いを知っていました。そして何かを礼拝したいという人間の欲求が、すべての人間は神に似せて造られているという、創世記に記されている事実から来るものであることを、理解していました。

偶像礼拝は、神から追放されて悪魔の支配に下り、誠の神の御姿を忘れてしまった、人間の罪から派生したものですが、何かを礼拝しないでは居れない人間の宗教心は、人間が神に似せて造られたという事実から派生したものであり、罪ではないということです。パウロの言うところは、「あなた方は、人間本来の在り方である、何かを礼拝するということをしっかりとわきまえ、それを発揮しておいでです。礼拝すべき方を礼拝していないのではないかと恐れて、「知られていない神へ」という碑まで作り、きちっと礼拝しようとしておられる努力は、まさに見上げたものです。パウロはここで、心にもないことを、耳がくすぐったくなるようなお世辞に変えて、人々の歓心を買おうとしたのではなく、思った通りのことを語ったのです。人が何か霊的なものを礼拝しようとするのは、人として欠かせない性質、本能、神に似せてつくられたものとしての、極めて基本的な重要な資質だからです。礼拝する心を持たない人間は、人間として重大な欠陥を持つのです。もしも人間が礼拝しようという直感、あるいは本能、知的理解を超えた情緒的な閃きを持たないならば、どれほど創造主についての知識を与えようとも、礼拝する心は起こらないことでしょう。乳を飲む本能的欲求と意思を全く持たない赤子が生まれたら、どのようにして乳を飲ませたらいいのでしょうか。現代医学ならば、強制定に栄養剤でも与えることになるのでしょうか。でもそれでは、いつまでも持たせることはできません。パウロは、アテネで異邦人伝道を試みたとき、明らかに、偶像礼拝と、何か霊的なものを礼拝したいという、本能的欲求を分けて考えています。

私たち日本人も、同じ日本人に伝道するとき、パウロのように、何か気高い存在、目に見えない存在、手で触れることも言葉で説明することもできない存在を、そっと崇めている日本人の心と、偶像礼拝をしている日本人を、分けて考えることが出来ないでしょか？　日本人の宗教意識の低次元の分野では、日本人は八百万の神を拝んでいるかもしれません。しかし、日本人の精神的基盤を成している高次元の神道的感覚では、そのような低次元の神々を愚かなものとして否定しながら、そっと、信じる心を大切にし、なんとも説明できない気高い存在を認め、崇め、感謝しているのです。多くの日本人は、この気高い方を自然の物事の中に感じ、その恵みを日常生活の中で体験し、自分は命を与えられ、生かされてきたのだと感じ、素朴な気持ちで感謝を捧げ、崇拝し、祭りを行うのです。日常の中では、食事の時に恥ずかしげもなく手を合わせ、誰に言うでもなく、「いただきます」と言うのです。そこには明らかに、目に見えない気高い存在の、恵みに感謝をする態度あるのです。ただそこには、知的な教義も何もありません。まさに宗教に至る前の段階なのです。多くの西欧の宗教学者や社会学者たちが、日本にやってきては神道のことを研究して驚いています。日本人の精神的土壌である神道には、教えがない、教義がない、倫理も道徳もなければ肝心の礼拝の対象さえない。これは宗教とは言えな

いと結論付けた人も少なくありません。西欧人の宗教の定義には入らないのです。

私たちは日本人を日本人として作りあげている、神道と言うこの独特な存在、宗教とは言えず、文化とも言い切れないこの摩訶不思議な存在を、もっとまじめに研究すべきです。神道を偶像宗教と決めつけ、神道の信奉者を偶像礼拝者と非難するのは、まさに愚の骨頂です。筆者は６０年以上にわたって、クリスチャンとして生きてきました。そのうち５５年以上は伝道者として暮らしてきました。そして、やっとこのことに気づきました。西欧のキリスト教では気づかないのです。しかも筆者は２３年間の海外宣教師の経験を持ち、日本と言う森を外側から眺め、その全体像をつかみ、日本の文化や宗教を外側から見る習慣を身に着けました。それと同時に、日本人として内側から森を見まわし、一本一本の木々、一輪一輪の花々を観察することもできました。すると、日本人にも、西欧人にも気づかれないできた日本人の精神と宗教性に、気づくようになってきたのです。

日本人に伝道を試みるとき、私たちは多くの西欧宣教師のように、戦う姿勢で伝道するのはではなく、かといって、自由主義の宣教師の多くがやるような、妥協的戦略でただ神道の言うことも受け入れた振りをするのでもなく、本当に、神道のすばらしさを聖書の学びと共に学び取り、日本人の精神基盤の崇高さに感動しながら、それを通して伝道することが出来ないでしょうか。パウロが「知られていない神へ」と言う祭壇から、話を始めたようにはできないでしょうか。実際の所、日本人の神道精神の崇高さは、パウロが対面したギリシヤ神話の愚劣さとは、比較にならないほどなのです。

Ⅲ.　始めは共通のテーマ

伝道とは、違う信仰、違う世界観、違う人生観、違う価値観、違う生き方などなど、すべて違うことに、異なった方向を示し、そこに招き、勧め、一歩踏み出すように励ます仕事です。それをはじめから「違う」と強調して話し出すと、聞く方には大変な緊張と躊躇を生み出します。変化とは緊張なのです。人間は本質的に現状維持を求める、保守的傾向を持っているものです。変化は冒険であり、楽しく、明るい未来も考えられますが、危険もあり、乗り出すには恐れが伴います。それでパウロは、まず、共通のテーマ、共通項の、「そうだ。そうだ」から始めています。その共通項とは、「私とあなた方は、同じ神を拝んでいるのです。私が拝んでいる神は、皆さんも拝んでいる神です。特に気を付けて、「知られていない神へ」という祭壇まで設けて、皆さんが拝み続けてきた神を、実は、私も拝んでいるのです。私は皆さんとは違う国、違う原語、違う言葉で生きてきましたから、同じ神でも呼び名は違っているかもしれませんが、本当は同じ神なのです」と、嘘偽りなく、本音で言うことが出来る点です。

私たち日本人は、世界でも珍しいほど唯物思想で教育されてきました。学校でもどこでも、宗教教育と言うものはありません。９０パーセントに近い人たちは、「神なんて存在しない」と言います。理性的思考能力を使うと、日本人のほとんどは無神論者なのです。ところが、この同じ日本人の多くが、理性を超えたところで、つまり感覚では、あるいは情緒的には、目に見

えない、手で触れることも、口で説明することもできない、神秘的で、大きく、強く、気高く、優しく、恵み深く、優しい存在、神と呼ぶにはあまりにも尊い存在を、感じながら生きているのです。だから多くの人が、「自分の命は与えられたものだ」、「自分は生かされているのだ」と、直感的に感じ、躊躇することなくそのように言うことが出来るのです。

私たちは、日本人の理性的な面に対応するような伝道の仕方を改め、情緒的な面、感覚を大切にした話から始めたら良いのです。しかも、通俗的な神道の感覚ではなく、みんなが納得できる、高尚な神道感覚から話し始めたら良いのです。ただし多くの日本人は、自分たちの中にある、高尚な神道感覚と通俗的な、言い換えると堕落した神道感覚の違いに、まったく気づいていません。ですから、その違いを理解してもらうことも大切です。これは比較的簡単に可能です。多くの日本人は、改めて、自分の中にあった矛盾した神道の感覚について、気づくことになります。そして、なるほどと思うのです。そして理解します。自分は意外に高尚な神意識を持ち、高度な倫理感覚を持ち、正しく生きようとしてきたのだと。そしてそれが、キリスト教が用いる旧約聖書の教えに、ぴったりと合致することに驚くのです。日本人の多くは、キリスト教が教えるのに失敗してきた、人間は神の姿に似せて造られたという事実と、そこから神学的に類推できる人間の性質、特に神を感じ、神を礼拝したいと願う人間の宗教性に、大いに同調できるのです。そしてそこから日本人は、キリストが教える優しい父なる神、良い者にも悪い者にも、雨を降らせ、太陽を昇らせる神、空に鳥を飛ばせ、野に草を生えさせ花を咲かせられる神に、親しみを感じ、違和感なしに、すんなりと受け入れられることが、よく分かるのです。キリストが教え強調された神は、普通旧約聖書から読み取ることが出きる、律法主義の厳しい神では無く、犠牲より憐れみを大切にされる神、つまり律法の厳守よりも本当の人間らしさを大切にされる神、言い換えると神に似せて造られた人間の、神に似た点を深く理解して強調される神です。それが日本人の感覚に、非常に強く訴えるのです。

自分を仏教徒とみなしている日本人に対しても、同じことが言えます。仏教を批判し、非難し、断罪し、嘲笑してはなりません。そこにはたくさんの間違いがあり、醜いところも数多くあります。宗教には、醜く、断罪されなければならない点がたくさんあります。特に西欧のキリスト教には、無尽蔵と言えるほどたくさんあります。私たちは宗教論争をするのではなく、福音を語るのです。仏教の素晴らしい点、聖書の教えとの共通点から始めるのが良いのです。残念ながら、仏教には聖書の教えとの共通点は多くありませんが、少なくても、何かを礼拝し、感謝をする気持ちを表現したいと願う気持ちは、聖書の教えに通じるものですし、ある日本的仏教の中には、弥陀の本願としての慈悲を強調するものもあります。少なくてもこの弥陀の本願が、私たちの父なる神の本願とよく似ているということは、広く知られている事実です。私たちはほかの宗教を毛嫌いするだけではなく、その宗教の中にある素晴らしい面にも、心を止めるべきなのです。それがピリピ書四章でパウロが語っていることです。

Ⅳ.　最も大切な主題から

パウロは、異邦人に伝道するのに、最も大切な概念、あるいは考え方、世界観、人生観、価値観、倫理観の、すべてに関わる問題から話し始めました。それは、キリストの十字架の話ではありません。旧約聖書の専門家、パリサイ人のエリートとしてのパウロは、旧約聖書が指し示す救い主、贖い主キリストの話をしたかったに違いありません。しかし彼はその気持ちを抑えて、もっと大きな主題から話し始めたのです。その大きな主題とは、子なる神キリストの十字架の贖いではなく、天地創造の主役であられた父なる神、創造主である神についてです。ヨーロッパで発展されたキリスト教は、パウロの神学の表層的学びで終わり、パウロの神学の本質的部分を見落としています。パウロの神学の本質は、創造主である父なる神です。パウロはキリストの贖いと復活の力、さらに、そのキリストの普遍的福音の教えとその理解、そしてその伝播について非常な努力を重ね、大きな仕事をやり遂げました。彼のその努力と献身を、疑うわけではありませんが、それはあくまでも、パウロのパリサイ的な律法理解と、彼の時代に聖霊なる神が啓示をもって彼を教え、霊感をもってその啓示を誤りなく書かせられたために起こった、勘違いの副作用です。パウロはパウロの時代の中に生かされ、その中での必要に応じて働かされたのです。何もない空白の中で、論文でも書くように聖書を書いたのではありません。あくまでも実際の問題の中で、実際の必要に応じて書いた実用書が、現在聖書の一部として残されているのです。

当時のユダヤ人はすでに充分に近いほど、創造主なる神について理解し、救い主であるキリストの出現についても知っていたために、パウロは、キリストの働きの真の意味について教えることに集中し、それを発展させることに力を注いだのです。異邦人伝道のために論じることはほとんどありませんでした。

しかし彼が完全な異邦人へ語りかけたとき、彼は創造主である神から始めなければならないと判断したのです。それが理解できなければ、キリストの贖いの働きも、キリストの復活も、普遍的福音の重要な教えも、意味をなさないことになるからです。天地創造の神の理解があって、初めてキリストの理解があるのです。そのことが分からないまま、パウロの時代の歴史的変換、神学的進展に捕らわれた、パウロ的宣教を行っていてはならないのです。それはユダヤ教の会堂では意味のあることでした。しかし完全な異邦人たちを前にした、アテネでの宣教では意味を成さなかったのです。

それは、現代の日本における伝道でも同じです。日本人の神意識、宗教観、倫理観、世界観、価値観の理解なしに、偶像礼拝をする罪人として、日本人を取り扱ってはならないのです。たとえ実際に低級な通俗的な神道に陥って、偶像礼拝をしていたとしても、パウロのような賢いアプローチをすべきなのです。パウロは異なった点、論争となる点を後回しにして、共通の概念であり、最も大切な主題であったことから取り扱ったのです。完全な異邦人の日本人を相手に、キリストだの、贖いだの、十字架だの、悔い改めだのから話を始めようとする、おおきな誤りに早く気付くべきです。

V.　厳しい神よりも、恵み深い神

日本人の多くは、キリスト教に対する知識をあまり持っていません。持っていても間違った知識が多いのです。それらの間違いの中でも、最もよく見られるのが、キリスト教の神は厳しい裁きの神だ、聖く正しい神で、罪を憎み、罪人を皆殺しにしてしまう神だなどというものです。確かに聖書が教える神は厳しい神であり、聖く正しい神です。しかしそれが誤った概念の中で伝えられてはならないのです。それを避けるためにも、真っ先に、十字架だの、贖いだの、身代わりの死だの、悔い改めと言った主題に入ってはならない、つまり、キリストの話に持って行ってはならないのです。キリストの話は、天地創造の父なる神について、私たちに命を与えてくださった恵みと、罪を犯した私たちを直ちに滅ぼそうとは思われず、何とかして救おうとしてくださった哀れみについて、充分に知ってもらってからお話しした方が、わかってもらえますし、感動をもって聞いてもらえ、受け入れてもらえるのです。するとそこに、本当の悔い改めが興り、裁きの恐れに駆られた従順さではなく、感謝と感動と喜びによる従順さが生まれるのです。パウロはキリストではなく、創造主から話を始めました。

まず、父なる神の恵みを知ってもらうことです。神は、季節ごとに変わる豊かな食べ物を備え、人間の失敗に対しては太っ腹でおおらかな取り扱いをし、弱い者や小さな者に対しては彼らの痛みに対する深い理解を見せ、律法を守ることが出来ない哀れな者に対しては深い同情と哀れみを示し、空に鳥を飛ばせ野に花を咲かせる、細やかで美しい愛情をいたるところで表して下さいました。また神は美しい自然を造り、私たちを、その美しさの中に置き、その美しさを美しいと感じ、それを喜ぶことができるものとして、私たちを造ってくださったことなどにも感動してもらうのです。それらの恵みを受けることが出来る幸いを、喜んでもらうのです。

そして人間にとって最も重要な二つの命題、すなわち神を敬い、人を愛することを心がけることの大切さを教え、またそのように心がけるとき、神がそのようにすることが出来るように、力を与えて下さることに気づいてもらい、実際に神の力を体験してもらうことです。神を知るとは、神を体験してもらうことです。知的に理解することではありません。プロテスタントの福音派は、聖書を知的に理解することに重きを置き、神を体験することに注意を払わないばかりか、体験に基づく信仰を誤りと断定しますが、パウロが語り出したのは、天地を創造なさった大きな神に信頼し、その神の恵みを体験することでした。その大きな神を小さな祭壇に収めて、宮に安置してしまう偶像礼拝を避け、神を神として、見えない神、触れることが出来ない神、口で説明できない神として崇めることでした。パウロが強調したのは、私たちが共に認めている神は、人間が作った宮などに収めきれない大きなお方、全てのものを超越し、すべてのものを貫き通し、すべてのものの中に存在し、すべてのものをご自分の中に収めておられる、大きな力強い神でした。

VI.　悔い改めを迫らない

私たちが持っている、翻訳された聖書を読むと、ここでパウロは偶像礼拝の愚かさを語り、

あたかも、悔い改めを迫っているかのように読みとれます。しかしこれは、聖書の翻訳者たちが、パウロの神学を誤って理解し、神学としての厳しさと実際伝道における柔軟さを、取り違えてしまったのであり、翻訳者たちの思い込みによる完全な誤訳です。パウロはここで悔い改めることを勧めてはいないのです。それは時期尚早と言うものです。

パウロがここで使った、「悔い改め」と翻訳されているギリシヤ語は、当時のユダヤ人の間ではたしかに「悔い改め」と言う意味で用いられていましたが、一般のギリシヤ人たちの間では、もともとの意味である、「考え方を変えて」という、もっと柔らかい意味で用いられていたのです。つまり、同じギリシヤ語が、元々のギリシヤ人とそれを輸入したユダヤの宗教人との間では、類似はしているけれども、異なった意味合いで用いられていたのです。当時ユダヤ人たちが広く用いていた旧約聖書のギリシヤ語訳（70 人訳）は、紀元前二世紀ころにはすでに完成されていたと考えられていますが、この翻訳聖書が、「悔い改め」というヘブル語の訳語として、この言葉を用いたのです。多分、ユダヤ人の間では、70 人訳の翻訳が進められていたころには、すでにこの言葉を「悔い改め」の意味で用いていたのかもしれません。しかし一般の、クリスチャンでもないギリシヤ人は、そのようなことは知りませんでした。使徒パウロは異邦人の町で育ち、ギリシヤ語を用いて成長しました。そしてまたエルサレムで、ユダヤ教パリサイ派の超エリートとしての、教育を受けていました。ですからパウロは、ギリシヤ人とユダヤ人との間では、この言葉の意味が異なっていたことを、充分に理解していたはずです。したがってギリシヤのアテネで、完全なギリシヤ人たちに語ったパウロは、ユダヤ式ギリシヤ語ではなく、オリジナルなギリシヤ語を語ったはずです。ですからここは「悔い改めて」と言う厳しい言葉ではなく、「考え方を変えて」と柔らかく語りかけたものと判断されるのです。

パウロは実際の伝道の場では、やたらに厳しい言葉を語ることが多い、現代の西欧の宣教師たちのようにではなく、できるだけ、怒りや反感を引き出すような言葉は、避けていたように思われます。真の悔い改めは、造り主である神の恵みを、充分に知ったところにあるのです。

Ⅶ.　一握りの収穫

アテネでのパウロの伝道は、大収穫を得るものではありませんでした。ほんの一握りの人たちが信じただけです。これをもって、パウロのアテネでの伝道は失敗だったと言う人が、福音派の中にはたくさんいます。彼の失敗は、粋がってギリシヤ哲学の罠にはまって、聖書以外の話をしたところにあるなどと言うのです。でもこれは完全な誤りです。考えてもみてください。まったくの異邦人が、わずか数時間（多分）の説教で、何人も救われているのです。救われなかった人たちは、初めから救いなどには興味がなく、論じあうことに面白さを感じていただけであり、死人の復活などと言う途方もない話になると、すっかり興味を失ってしまったのです。しかし、もう少し真面目に話を聞いていた、多分聞くだけだった婦人たちや、わずかの名もない人たちが救いを受けたのです。もしも、これと同じことが日本で起きたなら、大成功です。

フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸したとき、わずか数日で確か２千人の改宗者が出た

という話が伝わっていますが、まず、眉唾ですね。ザビエルはごくわずかの日本語しか話せませんでしたし、通訳を通したとしても不充分であり、そんなに早く、多くの人々がキリストを信じるのは不可能です。しかしこれが、集団生活に近い暮らしをしていた人々ならば、集団改宗としてあり得ない話ではありません。それにしても、初めて日本に上陸して、わずか数日の滞在でと言うのでは、むりがあり信じがたいことです。やはり、ザビエルのもたらした教えに、改宗するだけの益があると、判断されなければなりません。そのように判断されるには、それだけの時間が必要です。

しかし筆者としても、パウロのアテネでの伝道は、失敗に近いものだったと思います。その原因は、彼が先を急ぎすぎて、盛りだくさんの話をしてしまったことにあります。もっとゆっくりと時間をかけて話さなければ、理解されるべきものも、されないで終わってしまいます。初めに説明したように、パウロは先を急いでいたために、そのようなことになったのだと思われます。異邦人の間での福音宣教には、たっぷりと時間が必要なのです、それだけ、忍耐と寛容と信仰が必要なのです。